



ロバートソン・フィルムズのご案内



(<http://www.robertsonfilms.info>)

■ ジェームズ・ロバートソン (James Robertson) 1911-1988

精神科ソーシャル・ワーカーで、かつ精神分析家でもある。

1948年から1976年まで【Tavistock Clinic and Institute】を拠点に活動した。



【Dr. ジョン・ボウルビイ (John Bowlby) の推称のことば】:

《Mr. J.ロバートソンは実に非凡な人でした。誰もなし得なかった、すぐれた業績をわれわれに遺してくれた。彼の綿密な観察力、そしてドキュメンタリー映画製作の卓抜した手腕でもって一つの‘歴史’を作り上げたといっても過言ではない。

彼は「子ども病棟」の面会時間の規制緩和を求めるキャンペーンを展開した。当時にしてはまったく注目されていなかった問題領域であるから、無知と偏見に晒され、手酷い批判を浴びながらも断固立ち向かった。その勇氣は今や伝説となって語り継がれている。彼は「子ども病棟」の改革者として後世に名を残すに違いあるまい。無論その他の分野でもさまざまなことを成し遂げた人ではあったが・・・。私といたしましては個人的にも彼の尽力に深い感謝を捧げたい。》

■ ジョイス・ロバートソン (Joyce Robertson) 1919-2013

【the Association of Child Psychotherapists】の名誉会員。

【the Anna Freud Wartime Nurseries】の実習生であった。

【the Anna Freud Centre】で1956年から1963年まで勤務し、それから【Tavistock Institute】へと移籍した。

そこで、夫の James Robertson と一緒に

『Young Children in Brief Separation』の共同企画に参加した。



■ 概説

ジェームズ&ジョイス・ロバートソンは、生後17ヶ月から3歳の子どもの観察を研究しました。1948年以降1952年迄の間です。これは1960年代に引き続かれました。研究対象の子どもたちは入院したり、もしくは乳児院に預けられたりしております。彼らはその養育者から、数日間から数週間の間引き離されたのです。ロバートソンは母親から乳児を引き離すことは有害であると確信しておりましたが、医療従事者らはそれに反対しました。そこで映画撮影機を入手し、子どもの分離期間中の映像を記録したのです。それらを子どもの養育に携わる人々に見てもらうことになったわけです。

ボウルビイとロバートソンは母子分離についての共同研究者でありました。ボウルビイは子どもの母親からの分離について今や権威とされる理論を発展させた科学者です。ロバートソンは、その調査研

究を、病院の面会時間の厳しい規制ゆえに起きた母子分離によりいっそう焦点づけました。彼ら相互の協力によって、幼い子どもが母親から或る一定の期間分離を強いられた場合には、‘抵抗 protest’、‘絶望 despair’、‘否認 denial’（ボウルビイはこの最後の段階を‘心の離脱 detachment’と呼んでおります）といった段階を経るといふ、今では周知の理論が打ち出されたのであります。

ボウルビイは国際的にも理論家として著名であります。母親のケアと子どもの発達という分野の専門家として認められ、広く賞賛されています。ロバートソンは、彼の妻ジョイスとともに、ボウルビイの母親から分離された子どもたちの調査研究に携わっただけではなく、病院における子どもたちの福祉のためにもキャンペーンを展開するという重責を担ったのであります。ジェームズ・ロバートソンの、人の心に訴える語りの方と熱意によって、入院中の子どもを親が面会することを認める重要性を促したということで国際的な評価を得るに至ったわけでありませう。

ボウルビイとロバートソンの仕事は、当時の医学の新知識、つまり‘交差感染 cross-infection’（異なる伝染性疾患をもつ入院患者間の感染）とほぼ同時期に起きております。実にこれが子ども病棟から親達を排除するといったことの理由の一つであったわけですね。そして彼らの仕事から、子どもの入院時に親の面会を許可するという考えを擁護する、コミュニティ(地域)・グループの運動が展開されたのであります。これらの要因の組み合わせが多くの先進国の健康システムに改革を促す大きな契機になったといえましょう。ボウルビイの理論的業績とロバートソンの使命感に溢れた熱意のおかげで、政府機関の方針、医療スタッフの態度、そして親達の期待感が変わったのであります。先進国での子ども病棟そして病院において今日では親の面会がごく普通に認められておりますし、彼らをチャイルド・ケアの企画および実践に積極的に参加させるに至っております。

ジェームズ・ロバートソンの分離不安の研究は、彼がジョン・ボウルビイの共同研究者として【タヴィストック・クリニック】に入所して始まりました。彼の任務は、母親から離れた幼い子どもの反応を映像で記録することにあつたのです。その分離の例としては、出産のために入院した母親から分離された子どもを観察する計画でありました。しかしながら、このような子どもを数名見つけることは困難でした。従つて研究の対象を得るために、ロバートソンはシナリオを逆さにし、病院に入院中で、厳しい面会制限のために母親から分離された子どもたちを観察する許可を得たのです。入院中適度な世話をしてもらいながらも、彼らは気持ちを動揺させ、途方に暮れておりました。特に3歳以下の子どもであります。彼らは泣き叫び、惨めで、引きこもりました。これは世界的にも見られた現象であります。医療現場ではそれまで無視され否認されていたわけですね。ロバートソンは数年を掛けて、【タヴィストック研究所】に客観的な観察データを提供しました。この期間中、彼は「子ども病棟」の子どもたちへのより人間的な扱いが実践される道を模索しようと決意したのであります。

ボウルビイとロバートソンの合作の成果としては、【A Two Year Old Goes to Hospital(入院する2歳児)】(1952)という有名な映画があります。この映画は、入院のために母親から引き離された幼子

の激しい苦悩を撮影したもので、ハンディーな小型撮影機による完全なドキュメンタリー映画でした。その数年後には【Going to Hospital with Mother】を製作したのです。これら二つのフィルムは、世界中で上映され、ジェームズ・ロバートソンによる提唱の骨折りによって、画期的なインパクトを与え、その後あらゆるところで現在のような病院での幼い子どもと家族のありように変わったといえます。即ち、この記録映画は病院の面会制限を緩和させるという効果をもたらしたのであります。

さらに、ジェームズとジョイス・ロバートソンは4人の子どもたち(ジェーン、ルーシー、トーマス、ケイト)を、彼らの母親が入院中に養育しました。彼らは子どもらがどのようにこうした短期の母子分離に耐えられるかについて詳細な観察を実践したのです。これら4人の子どもらはとても落ち着いて、新しい環境にもよく適応しました。これはロバートソンが子どもらの家庭環境に極力似たものを準備したからであります。その一方で、観察例・5番目の子どものジョンは、乳幼児施設に9日間預けられました。最初万事うまくいくように見えたのですが、2日過ぎた頃からジョンの行動が悪化し、日増しに疲弊してまいります。彼は注意を引こうとぐずぐずと多くの時間泣いておりました。思うどおりに注目を得られないと、彼はティディ・ベアに愛着し、しがみつきました。一週間目には顔を見せにきた父親を見て喜んだふうでしたが、2週目にはぼんやりと虚ろで、父親をも無視することが多かったです。母親が病院から戻り迎えにきたとき、ジョンはかなきり声をあげ、彼女から身を反らし、激しく拒んだのであります。

この【Young Children In Brief Separation】の個々のフィルムは、それぞれがそれ自体の研究ですから一つずつでもよろしいのですが、幼い子どもが母親からの分離にどう耐えるかは、年齢、成熟度、分離以前の親子関係、そして代理のケアしてくれる人物の質によっても影響されることが示されていますから、シリーズとしてもそれぞれを互いに比較なさんと大変に有益となりましょう。それらはまた正常な発達の多くの面をも示しております。従いまして、これらフィルムは教材としても広範囲に使えるものと思われれます。小児医療、看護、チャイルド・ケア、心理学、精神医学、そして社会科学の方面であります。専門職にある人もまた一般の方でも幼い子どもたちの情緒的ニーズについての話し合いを大いに盛り上げる素材として活用されるででありましょう。これらフィルムは社会に関連した学問(social studies)、そして学童の5歳・6歳の発達コースにも教材として適しているものと考えられます。さらにはジョンの事例は、子どもの発達について教える以上の意味があります。乳幼児、高齢者、精神病患者、あるいは受刑者など、安定した支持的関係を必要としている人々に対していかなる適当なケアを施すべきか、彼はそれを考えることをわれわれに促す人間的なジレンマの縮図といえましょう。

ロバートソンの調査研究は、母子分離期間中に子どものいつも馴染んでいる日常の決まりを極力守ろうとしたならば、分離が子どもへの深刻な悪影響をもたらすのを幾らかでも回避できることが示されました。こうした研究成果から、入院中の子どものケアは30年前とは格段に違います。今日では良き心理的なケアが身体的なりハビリテーションにとって必要不可欠だということが認知され、そして母子間の絆が途絶されないよう極力配慮されております。従って、面会時間の制限がかなり緩くなりましたし、24時間ぶっとおしでも、病室への親たちの出入りは今や容認されております。

■【入院する2歳児 Two Year-Old Goes To Hospital 】 (1952)

ローラ: 生後2歳5ヶ月 8日間にわたる入院

ジョン・ボウルビィとジェームズ・ロバートソンは(ダイナ・ローゼンブラスの協力をえて)、1952年両親との関係が安定していた2歳5ヶ月の少女ローラを通して、短期間の入院による分離がその子にどんな影響をおよぼすかを研究しようとしてしました。ここには小さな女の子が母親から引き離され、入院したために苦悩する姿が示されており、高い評価を得た記録映画であります。子どもがあまりにも幼いとしたら、こうした経験に心の準備のしようもなく、かつ母親の不在にさして気に留めないというはずはありません。病院に入院するということで子どもにどのような問題が起きるのが示されており、かなり鮮烈な記録といえましょう。この映画は‘national and historic importance’に選定され、コピーは National Archives に保存されております。

もしも入院するということが母親のケアを失うということを意味しているとしたら、幼い子どもは大いに心を惑わすに違いありません。たとえ医師や看護師、それにプレイ・レイディズ(病棟付きの子どもの遊び相手になってくれる女性たち)がどんなに親切であったとしても…。このドキュメンタリー映画は1952年に製作され、当時病棟への親たちの面会時間が厳しく制限されていたせいで惹起された幼い子らの窮状に人々の注意を大いに喚起したのであります。

ローラは、当時2歳で、ちょっとした手術のため8日間入院しました。彼女はなぜ母親が不在なのかを理解するにはあまりにも幼かったのです。母親の姿は見え、ナースたちは時間交替の勤務でしたから、頼ってすぐれる相手が誰もいないまま、不安、恐怖、それに苦痛に耐えねばなりません。彼女は直腸の麻酔には極度に動揺しております。それから彼女はおとなしくなり、一見‘落ち着いた’かのように見えました。しかし彼女の滞在の終り頃には、見舞いにきた母親から身を引いて、なかなか近寄ろうとはしませんでした。母親への信頼が著しく揺らいだのであります。

近年、子ども病棟では大きな変革がありました。それも或意味、この記録映画への反響がもたらしたものとと言えます。しかし今尚も多くの幼い子どもたちは母親の付き添いなしに入院しなければなりません。たとえプレイ・レイディズやボランティアがいたとしても、入院が彼らの悲嘆を深め、その後の心の健康を脅かすであろうことは、まだまだ十分に理解されているとはいえない深刻な問題であります。

この記録映画は、親の付き添い無しに入院した幼い子どもが、どのように典型的ともいえる情緒的退廃をきたすか、そして深い悲嘆を表すなりあるいは隠そうとしたりするなど、その微妙な心の動きが示されております。その鮮烈さは、当時もそして今も尚変わらずわれわれの心に訴えかけます。

母親たちを入院した子どものケアに参加してもらうことで、病棟が幼い子どもらにとってよりハッピーな場所となりましょう。これは、子どもの将来のことを考えますならば、精神的健康を防止する意味で

も非常にポジティブに受け止められましょう。母親からの分離は、子どもに精神的外傷をもたらし、その痛みはその後こころの中でかなり長い間ひきずられ、おそらく永久的な情緒障害となるやもしれません。子どもに付き添う母親の存在は、こうした危険性に予め対処するでしょうし、彼女の存在は病気、苦痛、それに検査や手術といったものでもたらされる不安感のゆえに子どもが圧倒され打ちひしがれることをなんとか食い止めることの一助になろうかと考えられるのです。

・フィルムの概要

ローラは2歳5ヶ月のとき、脱腸手術を受けるために8日間入院しなければならなかった。彼女は、まだ一度も母親から離れた経験がありません。当時彼女は一人っ子で、その頃母親はすでに妊娠5ヶ月で第二子を身ごもっていました。結婚生活は安定しており、家族関係も幸せといえます。母親はローラの養育に多くの時間をかけ、子どもに対して大きな期待をかけていました。特に彼女はローラを泣かないように躰けておりました。



当然ローラは、恐らく、愛撫と抑制とを結合したような母親の躰けを受けたことが原因で、殆ど泣かない子どもになっていましたし、年齢のわりには感情的表現を抑制しがちでありました。そのために彼女は知的でやませた女兒という印象を与えていたのです。

ローラの両親は、ローラに入院のための心の準備をさせましたが、病院では彼女が一人ぼっちになるということを受容させてはいなかったようです。最初ローラは看護婦に愛想よくしていたのですが、その後、警戒心が強くなり、衣服を脱がされようとした場面ではママと叫んで逃げだそうとしております。規則によって入浴して着替えなければならなかったのです。しかも母親は不安げに隣室で待たせられ、初めて会った看護婦が入浴させるというわけでしたから、ローラは当然いやがって泣き出したのです。しかし、10分もたたないうち彼女の感情は抑制され、静かになりました。それ以後彼女は静かな忍従と、周りの状況次第で多少とも強く表出される、母親への強い思慕との間をさまよっておりました。

ローラは、ほとんどいつもベッドの中に一人でいました。しばしば彼女は緊張して悲しそうな顔をし、片手に家からもってきたぬいぐるみを、そしてもう片方の手には‘赤ちゃん’と呼んでいる毛布をしっかりと握りしめていました。彼女は泣かなかつたし、注意を引こうとしなかつたので、何も知らない人であれば、‘落ち着いた’と見做したであらう。しかし、ナースが短時間の遊び相手をするために近づくとときには、いつもローラの表情には感情が現れました。顔を涙でくしゃくしゃにしてママに会いたい！ママに会いたい！>と繰り返すのでした。多くの子どもたちのように泣き喚いたり、叫んだりすることは決してしません。彼女の感情が昂ぶっていることは疑いがありませんでしたけれども、いつもそれはある程度抑制されておりました。ナースが去ると、ローラはまた以前のような悲しげな抑制を続けたのです。けれども、入院して2時間後に始まった顔と鼻の持続的痙攣は、彼女の内心の緊張感を物語るものでありました。

彼女自身はほとんど泣かなかったのですが、他の子どもたちが泣くと、ローラはそれを非常に気にしました。或るとき、一人の男児が痛ましいほど泣いたことがあり、ローラはすぐに気に留め、その子どもの母親を呼び寄せるよう懇願したのです。幼いローラは良い子ぶって、＜私は泣いていないでしょう＞と叫び、それから力を込めて＜あの子のママを連れてきてあげて！＞とナースに頼んだのであります。

2日後、ローラの母親への思慕は次のように変えられてしまいました。彼女はナースに＜ママが私に会いたいって泣いてるわ。ママを呼びに行っちゃって！＞と言い張ったのです。数日後に、新しく入院してきた子どもが激しく泣くのをローラは落ち着いて見守り、それから彼を宥めようとして次のように言いました。＜あなたはママに会いたくて泣いているのでしょうか。泣かないで。明日になればママはくるわ。＞ その一方で彼女は、しがみついていた抱っこ人形を邪険に扱い始めたのであります。

ローラの母親は、大体一日おきに訪ねてきました。ローラは母親の登場を一目で確認しておきながら、挨拶をするまでに少し時間の掛かることがありました。最初の2回の訪問では、彼女は母親を見ると直ちに泣きふしたのですが、その訪問の初めは、顔をそむけました。その後、彼女がなんらかの喜びを表現するまでには、何分間か(最初の訪問時は2分間、第2回目の訪問は10分間)合い間がありました。それから間もなく、彼女は家にいたときのように、母親と楽しく遊ぶ幸福な子どもになったのであります。母親が去らねばならないことを告げると、ローラは不安になり、母親が立ち去るときには顔をそむけました。泣きはしませんでしたが、彼女の表情は変わり、落ち着きを失っておりまして。日没までにはまだ時間があつたにもかかわらず、彼女は、自分のいろいろなおもちゃを片付けてくれるように頼み、また母親が座っていた椅子をナースが移動させることを拒んだりしました。

3回目と4回目の母親の訪問の際には、ローラは涙を見せず、ただ虚ろな表情のまま母親と接触しようとしません。そしてしばらくすると興奮を見せました。4回目の訪問の際、母親よりも10分ほど遅れて父親が訪れましたが、彼女は父親をより暖かい態度で迎えました。そして父親が帰るとき、ローラは＜私も一緒に行くわ＞とすばやくささやきました。が、彼女はそれをあくまでも通そうとしたわけではありません。両親が帰っていった後、彼女は置き去りにされたことを無視しているふりを装っておりまして。

最後の日の朝、ローラはすすり泣いていました。前日の夜に、母親から退院して帰宅する予定であることをローラは聞かされていたのです。ローラはそのことを自分の心の内に秘めて、誰にも言いませんでしたが、彼女の抑制が一時的にくずれたともいえます。母親が彼女を連れ戻すために訪れたときも、ローラはまだ用心深く、いかなる喜びも表わしませんでした。母親が彼女の屋外用の靴を取り出したときになってはじめて、彼女は喜びに満ちて小躍りしたのです。それから彼女は自分の大切な玩具や持ち物をかき集めると母親と一緒に喜びいさんで帰って行きました。外に出ようとしたとき、ローラは一冊の本を落としたので、ナースがそれを拾って彼女に手渡したところ、彼女はまるでナースがその本を取り上げたとても思っているかのように、怒って叫び声をあげながら本をひったくったのです。これはこの8日間を通して、彼女が示した最も烈しい感情でありました。

帰宅してから数日間、ローラは、母親がほんの少しでも見えなくなるといつも落ち着かなくなり、いらして不安になりました。しかし、しばらくするといつもの彼女らしさを取り戻し、極度の不安に陥れたあの8日間の苦しい入院当時の記憶もしだいに忘れられてしまったように見受けられました。しかし、実際には、そうではなかったことを示す2つのエピソードが起きました。

最初のエピソードは、偶然の機会に発生しました。ローラの退院6ヵ月後のある晩、8ミリフィルムが自宅でローラの両親に見せられました。誰も知らないうちにローラは居間にそっとしのびこみ、たまたまそのときスクリーンに映っていた自分の姿をみてしまったのです。電燈がつけられたとき、彼女は怒りに満ちた声で興奮して叫んだのです。〈ママはあのときずっとどこにいたの？ねえ、どこにいたの？〉それから大声で泣き出し、母親から離れ父親のところに慰めを求めに行きました。彼女が示した感情の苛烈さに当然両親は驚き、彼女が怒って母親のもとから離れていったことにも困惑したのであります。

2つ目のエピソードは、それから3ヵ月後、ローラの3歳の誕生日直後に起こりました。両親に連れられて展覧会に行ったローラは、子どものために用意された遊び部屋で、病院のナースを思い出させるような白い制服を着た係員がいたにもかかわらず、喜んで遊んでいたのです。しかし、そこに写真屋さんが現れたとき、彼女はヒステリーを起こし、両親が彼女を宥めるのに1時間もかかったということです。明らかにカメラを眼にしたことが突然彼女に過去の辛い経験を思い出させたのであります。

これら2つのエピソードは、苦しい入院経験からローラが外見的には回復していても、それを思い出させるものが何かあれば尚も怒りと不安で反応する傾向を内面的に秘めていることを示しております。

■【分離不安の子どもたち Young Children in Brief Separation】 (1967-1973)

ジェームズ・ロバートソンとジョイス・ロバートソンは、比較研究を試みる必要から、施設とは違った形の受け入れの場を家族の中で作ろうとしました。彼らは、母親が入院している4名の子どもを自宅に引き取り、観察者としての役割と育て親 (foster-family) としての役割を果たしながら、子どもらを見守ったのです。この調査研究において彼らは、分離前の好ましい経験が、分離事態における子どもの反応にどの程度寄与するか、特に子どもが既に親しくなっている人物に引き取られて母性的な保護を受けるとどの程度の効果があるかという点について考察しました。

この目的でジョイス・ロバートソンはそれぞれの子どもを養育する場合には、できるだけ子ども自身の母親の養育方法を取り入れたのであります。又、養育環境の異質性を最小限度にし、同質性を最大限にするように心がけました。分離が起る1ヶ月程前に、子どもは保護される家庭に連れてこられ、その家族に紹介され、そしてこうした何度かの訪問によって親密感が醸成されていったのであります。その間、この子どもの母親代わりになるジョイス・ロバートソンは、子どもの発達程度や、好みや、

実母の養育態度などを詳細に観察し、子どもを預かった時点で彼らの生活環境ができるだけなじみのあるものとするために注意が払われたのです。いよいよ子どもを引き取る段になると、子どもの使いたれたベッド、毛布、おもちゃ、母親の写真が持ち込まれました。そのほか、分離期間中に母親のイメージを子どもの脳裏に常に鮮明に印象付けておくために、さまざまな努力が払われました。母親の代理の養育母親(foster-mother)は、子どもに母親のことを話したり、写真を見せたりしております。可能な場合には父親が毎日面会にくることが奨励されました。そして父親と養育母親はたえず子どもに対して、間もなく家に帰れるからと安心させることもいたしました。このようなやり方によって、環境の変化による衝撃を緩和させ、母親を喪失するという現象をありのままに受け入れ、別離は必要以上に長引かないということ子どもに納得させる努力が払われたのであります。

ロバートソン夫妻が養育した4人の子どもの場合、母親はいずれも出産のために入院し、1名ずつ別々の機会にケアされました。ケアされたときの子どもの年齢と養育日数は下記のとおりです。

・ジェーン	1歳5ヶ月	10日
・ルーシー	1歳9ヶ月	19日
・トーマス	2歳4ヶ月	10日
・ケイト	2歳5ヶ月	27日

尚、4名とも第一子で、両親と一緒に暮らしており、顔見知りの人に数時間預けられたということ以外に、これ迄母親との別離はまったく経験しておりません。

ここで分離不安の事例としてこれらの子どもたちを個々にご紹介いたしましょう。



ジェーン; 生後17ヶ月 10日間のフォスター・ケア

ジェーンは、母親が病院にいったとき、ジョイス・ロバートソンの手に預けられましたが、彼女を代理の母親(foster-mother)としてすぐさま受け入れました。食べ物そして生活習慣はいつも家庭で彼女が馴染んでいるとおりに守られております。父親は毎日顔を見せに来ましたし、養育母親は完全にジェーンのニーズを充たすべき、いつも側に付き添っていました。したがって、新しい事態にうまくとけこむことができたし、ジョンみたいに途方に暮れることもなく、どうにか我慢できる程度の不安感を抱くにとどまっております。母親との再会のとき、ジェーンは母親に対してはあたたかみのある、良き期待感に溢れていたといえます。しかし、彼女は養育母親にも愛着していましたので、なかなか容易には彼女から離れたがらず、不承不承なのでした。



・フィルムの概要

ジェーンは明るい、活発なこどもで、まだ言葉はそれほど喋れませんでした。母子分離以前に養育

母親 (foster-mother) が彼女との関係性を築くのは容易ではありません。なぜなら、母親が傍らに居る間は、17ヶ月の子どもは家族以外の人にさほど関心を払うことはないからです。ロバートソン家で寝泊りした最初の数日間、ジェーンは快活で機嫌がよく、ちょっと大袈裟によく笑い声をあげることがありました。彼女は始終誰にでもよく微笑みかけ、また微笑みを返してもらおうと躍起になることがありましたが、それはご機嫌をとろうとしているときのようで、ちょっと不自然にもみえたのです。

彼女の本来の家は同じ区画内にありすぐ近くでしたから、自分の家の門はわかっていたのですけれども、最初の4日間、彼女はそれに気づかないようであり、わざと避けているみたいでした。しかし5日目になると、彼女は門のところに行き、それを開けようとしたものの失敗し、塀越しに誰もいない庭に向かって頭を振り、門を閉めると、涙ぐんでロバートソン家に連れ戻されるのに抵抗しました。それから玄関から中に入ることを拒否して、母親と別れて以来はじめて「ママ」ということばを発したのであります。

最後の数日間、ジェーンの様子は変わっていました。もはや快活さは失われ、しばしば落ち着きをなくしたり、どことなくいらいらして、かんしゃくを起こしたり、興奮して泣きやすくなったりしておりました。親指を吸うようになり、愛撫を求めました。遊びにも集中しなくなっていたのです。

ジェーンがロバートソン家 (foster-family) のところにいた10日間、父親が毎日1時間ほど訪れました。最初のうち、彼女は父親と楽しそうに遊び、父親が帰るときは泣きました。しかし、日がたつにつれて父親がいる間はわざと無視したり、距離をとろうとしております。それでも彼が帰る素振りを見せると、直ちにしがみついて泣き叫んだりしたのであります。

生後17ヶ月でジェーンは不在の母親のはっきりとしたイメージを記憶にとどめおくことはできず、養育母親に愛着し始めていました。しかし母親が再び10日後に彼女を迎えにきたとき、その姿を見て、ジェーンは直ちに母親に気づきました。最初は少し不安げで恥ずかしそうであったものの、すぐに、かわいらしくご機嫌をとるような感じで微笑みを浮かべたのです。彼女はそのとき、養育母親と銅貨を財布の中に入れるゲームをしていたのですが、すばやく母親のほうに駆け寄り、そして遊び相手を母親に変えてしまっております。これからは母親がずっと自分の世話をしてくれるものと思ったようであります。

10日間の養育期間が終わるまで、ジェーンは養育母親 (foster-mother) に強い愛着を持つようになっていました。そして彼女と別れることをいやがったので、帰宅後数週間、養育母親は何度かジェーンの家を訪問しております。最初の頃、ジェーンは彼女を暖かく迎えました。母親との関係が再び深まって安定したものになると、養育母親の訪問はジェーンを当惑させ、母親と養育母親のいずれの方に甘えるべきかちょっとうろたえるような様子を見せております。

母親との再会時にはハッピーであったものの、問題がなくはなかったのです。ジェーンが帰宅してしばらくすると、彼女と両親との関係にひずみが生じてきました。彼女は両親のことばに従うこともあったもの

の、逆らうことも時折あり、両親は、そんなときには彼女に平手打ちをして従わせようとしていました。そのような場合、彼女は以前には見られなかったほど激しく泣きじゃくったのであります。別離の緊張を強いられたあと、ジェーンはたくさんマザリングしてもらったわけですが、今や彼女は母親を赤ん坊と共有しなくてはなりません。それにジェーンの母親の身になれば、まだ幼い二人の子どもらのニーズに合わせるのとは楽ではなく、手一杯であるといった状況が映されて、このフィルムは終わっております。



ルーシー； 生後1歳9ヶ月 19日間のフォスター・ケア

ルーシーは、ジェーンのように、まだ幼くて不在の母親の姿を記憶にはっきりととどめておくことは無理なのであります。それで彼女は養育母親 (foster-mother) のケアを何ら問題もなしに、すんなり受け入れたのであります。不安感なり抵抗せんとする行動なりのエピソードはなくはありませんでしたが、彼女も直に新しい環境にどうにかうまく収まったのであります。母親との再会時には、彼女は母親に対してとてもうれしげに振舞っております。



しかしながら、一つ問題があったのです。この19日間の間、ルーシーは養育母親に愛着をし始めておりました。フィルムは、その後も引き続き、ジェーンの感情に葛藤が起きていたこと、そして母親と養育母親 (foster-mother) とが共にルーシーのそうした気持ちを慮り、解決に向かってお互いが協力し合ったことが示されております。

この映画では、ジェーンのとくのように、とても幼い子どもは、不在の母親のはっきりとしたイメージを長くは記憶にとどめおくことができないために、ほどなくごく自然に代理母親を受け入れる様子が窺われます。ルーシーの場合、代理の養育母親との関係性は、分離期間が長引いたせいで、よりいっそう深まったといえましょう。そこで母親と養育母親 (foster-mother) はともに、ルーシーが、二番目に愛する人の突然の喪失を味わわずにすむために、ルーシーが養育母親を徐々に断念できるようにするために協力したというわけなのです。

・フィルムの概要

ルーシーは生後21ヶ月の丈夫な子どもで、動作もとても機敏でありました。まだ言葉は全然話せませんでしたが、遊びは自分一人で頭を使い、とても没頭しますし、集中力がありません。しかし物事がうまくいかなかったりしたとき、気持ちが内に引きこもりがちになります。母親との分離以前の段階で、時折彼女は陰鬱な表情をすることがありましたが、おそらくそれは母親の出産を間近に控えての妊娠末期に抱いた不安感にいくらか関係していたものと思われます。

ロバートソン家に馴染ませるため数回の訪問を試みたあと、ルーシーは迎えにきた養育母親に連れられて、何ら抵抗なしに両親のもとを離れました。最初、彼女はロバートソン家 (foster-family) の全員と穏やかに交流しました。とりわけ養育母親に一番なついたこととなります。そして最初の数日間、彼女はますます活発になり、彼女の塞ぎこんだ感情は、やがてかんしゃくやら陽気さそして優しさといった、幾らか生き生きした感情へと変わってゆきました。5日目にはルーシーは明るく朗らかに見えました。ほんの時折にだけちょっと引きこもったふうに見えることもありましたが…。どちらかという、一人遊びの中で気持ちの発散が起きていたようであります。彼女は母親との分離の直前に比べれば、確かに落ち着いているように見えました。

しかし、2週目になったとき、母親の不在によって惹起された緊張感が突発しております。彼女は機嫌が悪く、とてもいらいらし、何事にも否定的な気分で、食べ物を拒絶したり、物を投げ散らしたりしたのです。それも彼女のお気に入りの玩具すらも含めて…。

父親に対するルーシーの関係もほぼ同様な経過をたどりました。父親はルーシーを訪問したときに一度だけ彼女を家の近くの公園へ連れて行ったことがありましたが、その日彼女は父親と別れた後でいちじるしい動揺を示したのです。最初、ルーシーは養育母親の慰めを拒否しましたが、その後養育母親に泣きわめきながら抱きつき、離れようとしなかったということがありました。

それからさらに数日後、彼女はリラックスし始め、養育母親に愛情を向けたのであります。根気よく遊びに熱中し、彼女のお気に入りの抱っこ人形にも優しく相対するようになっていきました。しかし彼女は、折々に訪ねてきてくれる父親にはますます距離をもとうとしていきました。彼女のまだ未熟な対人関係性からして、この分離期間を凌ぐほどには充分堅固ではなかったといえましょう。

19日目に母親がルーシーを迎えにやってきました。ほんの一瞬戸惑い、彼女はちょっと気後れを見せたものの、やがて喜んで母親のもとへと駆けて行ったのです。しかしこの時期、養育母親との間にもまた強い愛情の絆ができていましたから、彼女とも離れがたく、明らかにルーシーの中に葛藤がある様子が窺われましたから、それを見るのは心痛むものがありました。この3日後に養育母親がルーシーと再会した折りに、彼女は愛情と忌避感との間を揺れ動くような表情をしました。微笑を浮かべるかと思えば、しかめっ面をしてみたり…。それから母親にしがみついたり、それでも養育母親が去る段には彼女は泣き叫んだりといった、複雑な反応を示したのであります。

そこで次の数週間の間、ルーシーの母親と養育母親 (foster-mother) は、共に協力し合い、ルーシーが徐々に養育母親を断念するように援助したわけです。最後のルーシーの印象深い姿について触れますと、彼女は或るゲームを一人で遊び始めたのですが、そのゲームの内容からして、別離と再結合とがしっかりと表現されておりました。そうしたことで、彼女は、養育母親に対しての愛情を心にとどめおきながらも、完全に再び母親の子どもになったということを示していたのであります。



トーマス； 生後2歳4ヶ月 フォスター・ケア10日間

ジェーンやルーシーよりも年上であったトーマスは、不在の母親を心のうちにとどめておくことができましたし、彼女について語ることもできました。このことと、父親が毎日訪ねてきてくれたこともあって、自分の置かれた状況についての理解は、年下の子たちには無理でしたわけですが、トーマスには充分可能であったといえます。



マザリング・ケアの必要の場合に、トーマスはなかなか養育母親 (foster-mother) との親密さを受け入れることができませんでした。それは愛情が絡んでくると母親に対する忠義立てに葛藤が起こるからであります。それで折々に、彼女が彼に世話を必要としている際に手を出すと、養育母親を攻撃することがありました。母親が病院から戻ったとき、他の年下の子どもとは違って、トーマスは養育母親のもとを去ることになら問題はありませんでした。

・フィルムの概要

トーマスは活発で、安定感があり、男の子っぽい印象で、ことばもよく発達した子どもでありました。この子は、父親と一緒に母を病院に送ったあと、代理親になるロバートソン夫妻のところによってきました。なんら問題もなく、父親に「くさようなら」と言い、父は面会に来る事を約束しました。以前に何度か訪問したことがありますから、トーマスは落ち着いて楽しそうにしていました。大抵の場合、彼の機嫌はよく、人なつっこくて、遊びや他の活動を楽しむことができたのであります。

トーマスは最初の2日間は活発すぎるほどでありましたが、その後徐々に彼は両親がいないことについて悲しみと怒りを表し始めました。彼は母親についてはっきりとした記憶をとどめており、楽しげに母親のことを話すようになり、ときどき母親に会いたいと言いました。彼女の写真に目を遣るのはちょっと辛いような印象があり、そして彼女の写真を抱きしめることもときどきありました。その後、突然淋しそうになり、「トーマスはいま考えているんだよ」と言いました。そんなふうに、家のことやおもちゃのことや両親のことに思いをめぐらしてぼんやりしているときもあったのです。或る日、彼は涙にむせびながら「お家の揺り木馬はどうしているかしら。ママはね、‘ごきげんはいかが、トーマス’ っていうんだよ。ぼくはママが一番好きなんだよ」と言いました。

ラグビーやフットボールを好む外向的な父親には、トーマスは自慢の息子でありました。トーマスも父親が大好きで、彼が訪ねてきてくれるのを心待ちにしてはいたのですが、父親の会ってくれる時間が限られていることは理解していました。が、そんな折、彼はなんとかして父親が去るのを阻止しようとしております。父親が去った後ほんのしばらく激しく泣き、涙ぐみながら父親の坐っていたところには誰も坐らせまいとして妨害したのです。そのように父親が帰った後は気落ちし淋しそうでありましたが、その他では上機嫌で、よく食べ、自分の家のときのように多少寝つきの悪さを示した程度でありました。

トーマスはまだおむつが完全には取れていませんでしたし、マザリングの必要はあったわけですが、ときどき彼は、養育母親 (foster-mother) の世話を受けることを拒否し、自分の世話をするのは母親の役目であると言い張りました。このように、養育母親への募る愛着は母親への忠義立てを脅かす葛藤となります。愛情を示すジェスチャーは攻撃に変わり、だんだんそうした渾然とした感情を彼自身持て余すようになります。彼は、養育母親の愛情を得ようとする欲望と、彼女に反抗したいという気持ちの間で揺れていました。養育母親が愛撫しようとする、この子はそれをはねのけ、<いや、ぼくを可愛がってくれるのは、ママなんだ>と言いました。トーマスは攻撃的となり、(これまで母がそうしてくれたように) やさしく扱われることを嫌がったのであります。

9日目頃には、短気になり、泣きべそみたいな喋り方をしたり、お漏らしをします。その午後、自分は赤ん坊であって、歯もなく、歩けもしないという新しい遊びを始めました。彼は明日、家に帰ることができるのを知っていました。彼は、<椅子に登ったらダメ、怒るよ、ってママが言ってた>と、母の言いつけを思い出したりしておりました。迎いの両親が到着したとき、トーマスはほんのちよつとの間きまり悪げであったものの、すぐにやさしい身振りで母親に近づき、じっと見つめながら髪の毛に触れておりました。彼の最初の関心事は母親に触れ、母親を眺める楽しみを見出すことであったのです。彼は彼女にお茶を出す真似をして、さかんに接吻しました。この時点で彼の注意は全面的に養育母親から両親のほうへと移り、彼は早く自宅へ帰ろうと親をせかさばかりでありました。

彼の母親に対する態度と、養育母親 (foster-mother) に対する態度とのこの非常に明らかな差異は、われわれの予想どおり、彼が家に戻った後も持続されました。しばらくして養育母親が彼の家を訪問したとき、彼は彼女に親しげに振舞うものの、同時にちよつと警戒する様子をも示しました。始終母親の側を離れようとしなかったのであります。こうして別離はうまく乗り越えられたようでありましたが、その後トーマスと母親との関係にはまだしばらく不信と攻撃の跡が残っていたといえます。そのとき彼はしばしば赤ん坊にも攻撃的でありました。



ケイト; 生後2歳5ヶ月 フォスター・ケア27日

ケイトは、母親との別離の前にロバートソン家を折々に訪ねておりますし、分離中、養育母親 (foster-mother) から愛情深いケアをもらっていたせいで、不安感で心が圧倒されるということはありませんでした。トーマスのように、ケイトは母親の記憶を心に留め続けることは可能でありました。彼女は家族人形で遊ぶことがあり、そうすることで家庭での生活を記憶に甦らせたり、いずれ戻るはずの両親との再会を予期したりしております。しかし別離が長引くうちに幻滅が募り、彼女は訪問してくる父親にはますます冷ややかになってゆきました。不在の母親に対して怒りを表すようになり、やがて自分一人で落ち着ける憩いの場所を見つけ、そこに閉じこもるようになったのであります。



・フィルムの概要

ケイトは、十分に成熟した、言葉もよく発達した子どもでした。ロバートソン家で予定された滞在期間は、母親が第二子の出産後の経過がよなくて合併症をきたしたため、27日まで延長されねばなりませんでしたが。ケイトは母親と離れて生活することには慣れていなかったため、彼女を預かる前にロバートソン夫妻はまず彼女の家で会うことにしました。ケイトはカトリック系アイルランド人夫婦の最愛の子どもでした。陽気ですぐに打ちとけました。厳格に育てられたせいか、年齢のわりには大変控え目です。両親はケイトに、しばらくの間お前はロバートソンさんの家で暮らすことになることを説明しました。しかしその子には、母親の不在を前もって想像することはできないことでした。ケイトの母親が入院のため家を離れる時点で、養育母親(foster-mother)もケイトを迎えに行きました。<ケイトはまたすぐに戻ってくるよ>という母親の言葉を彼女は頻りに繰り返しておりました。

母親と離れ離れになった初めの5日間、ケイトは食欲旺盛でよく眠り、大変陽気で協調的、活発でありました。彼女は<いい子にしているんだよ、泣くんじゃないよ>、<じゃがいもを食べようね>、<汚すんじゃないよ>という両親の教えを繰り返していました。父親は毎日面会に訪れておりました。

この間、彼女は十分なケアを受けておりました。ケイトは1週間ほどはなんとか耐えておりましたが、徐々にストレスを表面化してゆきます。欲求不満に耐えられることも少なくなり、不在の両親に対する失望感を募らせてゆきました。

第1週目の終わりごろから、この子の防衛による活発さは弱まってゆきます。ケイトは相変わらず陽気であったものの、不安発作を呈するようになってゆきます。養育母親(foster-mother)にしがみつ、欲求不満に堪えにくくなり、哺乳瓶やらボンボン[菓子]をいつも要求するようになったのであります。

第2週目になると泣きやすくなり、ぼんやり物思いにふけることが頻繁になりました。母親のことが話題になると聞えないふりをしたり、養育母親を<この人がママよ>と指さしたりします。あまり遊ぶこともなく夢みがちとなり、<ケイトは何を探しているのかしら？>と養育母親は彼女に呼びかけることが何度かありました。元気に振舞ってはいたものの、母親を求める気持ちが抑圧され始めていたのです。

10日目に、病院は母親との面会を許可しました。ケイトは最初遠く離れていて、そしてだんだんと母親から身を隠すようにしました。この面会中、ケイトは母の愛撫を受け入れたものの、それに反応するようなことはありませんでした。ところがロバートソン家に帰ったとき、<ママを見つけたわ。ママのところに連れて行って！>と言い、感情を爆発させたのです。また初めて怒りの発作を起こしております。その後数日間、ケイトは拒絶的、攻撃的であり、また涙もろくなっておりました。ときどき悲しそうに<ママ、パパに会いたい>と繰り返す言い、だがこの悲しみは不機嫌に変わり、しばらくして<ママなんか好きじゃない、ママは意地悪！>と言ったりしたのです。父親にはあまり関心を示さず、17日目に<あっちへ行っ！>と言って、父親の面前で扉を閉めたということがありました。

17日目、病院での2度目の面会のときは、ケイトは母親とよくお喋りをしたものの、まだいくらか距離を保っておりました。それから逆らうことなく連れ戻されるままにしていますが、そのすぐ後、路上で養育母親(foster-mother)に平手打ちをくわせたのです。その後、家族人形との遊びで、彼女は不在の両親に対する彼女の感情の葛藤を実にありありと詳細に示しております。そして彼女はますますモノへの執着を深めてゆきました。哺乳瓶やお菓子であります。

彼女は徐々にロバートソン家(foster family)の中で充分穏やかになってゆき、養育母親に愛着しました。彼女の存在が母親の肯定的なイメージを保持することになったからであります。

この第3週目の間は、ロバートソン家でくつろいでおります。すっかり安心してそれほど依存的になることもありませんでした。第4週目、ケイトの願望はもっぱら両親に会いたいというものであります。もう愛されないのではないかと、自分は必要ではないのではと怖れていたのです。養育母親は、ケイトのママは彼女を愛しているし、また一緒になれることを強調しました。この可愛らしい娘は、養育母親の注意を引こうとします。不機嫌の発作のあとには、陽気で上機嫌が長らく続きました。

父親は規則的に顔を出してくれておりました。父親と会う楽しみは、第2週で失望となり、第3週目には怒りに変わりました。＜パパはなぜ家に連れて帰ってくれないのだろう？＞ ケイトは彼に対してどんどん冷ややかになってゆきます。代わりに今や代理の養育父親の方へと心を向けていたのです。

27日目、遂に彼女が家に帰る日がきました。ケイトは非常に緊張して激しく動き回り、ついには不安の頂点に達し、嘔吐しました。非常に興奮して自動車でロンドンの街を横切っていく道中ケイトは何度も帰宅を打ち消して、無意味な歌を大声で歌っておりました。家の近くの道に気付いたとき、やっと彼女は見せ掛けを捨ててくあれママの家よ！>と叫びました。家の中に入ると、ケイトは養育母親を無視して、自分の母親のところへ駆けていき抱きつきました。1時間ほどは母親に甘えつづけたのです。かくして親密な関係が直ちに再開されたのですが、それとは対照的に、彼女は自分を4週間にわたって世話をしてくれたところの、側に静かに座っている養育母親を完全に無視したのであります。

ケイトはほとんど動揺を示さずに家庭に復帰しましたけれども、以前に比べるとよりいっそう両親の関心を引こうとする傾向が認められます。自分の家に帰って一週間、ケイトは落ち着きなく、哺乳瓶を求め、おねしょをし、ときどき泣いたりしました。父親に甘え、母親とよくお喋りをしたがります。厳格な両親は、この子どもの気まぐれをあまり受けつけず、家を離れる以前と同じように行儀よくするよう娘を諭したのであります。

家に帰って2週間目、ケイトは簡単な手続きをするために学校に連れてゆかれたということがありました。将来、ケイトが5歳になったとき、学校に行けるかどうか母親は気掛かりであったので、2年早い時期に学校へ登録のために連れて行ったわけでしたが、その夜ケイトは何かうなされたように呻き声

をあげ、夢にうなされたのです。翌朝は息苦しそうでありました。気管支喘息と診断した医師は、何かストレスがあったのではないかと質問しました。そこで母親は前日学校へ連れて行ったとき、校長がケイトの入学を‘認める’といったことを思い出したというわけです。これが最初の喘息の大発作でありました。確かにそれは、新たな分離に対する不安であったのです。この不安は、言いたいことを言えないがために、ケイトはそれを身体化するしかなかったといえましょう。言葉で表現されぬままになっていたもの、それは弟の誕生にまつわることでありました。両親はケイトに、赤ん坊の弟にも正しい行動をとるよう厳しく要求したのであります。



ジョン； 生後17ヶ月 乳幼児施設に9日間 (1969)

ジョンは、母親が出産で入院中に、乳幼児施設で9日間を過ごしたとき、1歳5ヶ月でした。父親は専門職に就いており、最も忙しい時期でもありましたが、親戚で彼の世話ができる者は一人もいなかったのです。その乳幼児施設は設備がよく、そこで働く保母の訓練については定評がありました。しかしながら保母たちは、子どもたちに対してではなく、義務に対して忠実であったに過ぎません。ジョンの養育は特定の誰か一人の保母の手に委ねられることはありませんでした。グループでのケアというシステムでは、不在の母親の代理になることは誰にもできることはありません。ジョンは、必要とする慰めを得ようと彼女らとの関わりを必死に求めました。が、気持ちは挫かれ、徐々に意気消沈していったのであります。



・フィルムの概要

ジョンは愛情深く育てられた子どもで、母親のケアから一度も離れたことはありません。言葉はまだ充分には話せておりませんでした。母親が第二子を出産するために入院した折、彼は生後17ヶ月でしたが、乳幼児施設の‘よちよち歩きの幼児(toddlers)グループ’に預けられたのであります。

母親の陣痛が夜中に始まったため、病院に行く途中に母親はジョンを乳幼児施設に預けたのであります。翌朝、彼はにこやかな若い保母メアリーに挨拶されました。彼は親しげに彼女に応答し、服を着せてもらう間、ことばのやりとりをしたのです。彼は、周りの他の若い保母たちに親しげに振舞ったものの、彼女たち誰からもそれ以上の世話はしてもらえませんでした。日暮れになると、メアリーが彼をベッドに寝かせてくれましたが、その後は側にいてくれなかったので、絶望したジョンは抗議の叫び声をあげました。彼にはあらゆるものが堪えられなかったのです。食べ物も生活の決まりも彼にはなじみのないものでした。食事中の人々の騒音や動きにも。そして、子どものリズムにではなく、時計に合わせた日課にも…。ジョンの睡眠は、大人たちによって完全に乱され、リズムを失ってしまったのです。

保母たちは‘看護’というレベルではジョンの世話をしていたものの、彼に話しかけるわけでもなく、ジョンの希求するものやら混乱した気持ちに対してはまったく意に介さなかったのであります。異質な世界

に投げ込まれ、ジョンは誰に話しかけたらいいのか、その相手を一人として見つけることができませんでした。彼と環境との間の仲介者がいなかったのです。それであらゆるところから自分が攻撃されているように感じたわけなのです。

2日目もまた、最初のうちはかなりうまくいきました。一日大部分を、ジョンは他の子どもたちから離れて、一人で隅の方で遊んでいました。ときどき彼は、母親のような世話をしてくれそうな保母を探し求めました。しかし、彼の探索的な接近は容易に見過ごされてしまい、他の子どもたちによって横に押しやられてしまうのです。彼の周りには、生後間もなくから乳児院に入れられていたために‘うるさく、攻撃的で、自己主張が強く、要求がましい’多くの子どもたちがいたわけで、そうした周りの子どもからの攻撃からジョンを守ってくれる人は誰もいませんでした。一日中彼はほとんどしゃべらず不平も言わないままでしたが、父親が訪ねてくると彼の様子が変わりました。父親が帰宅のために立ち去ろうとすると、ジョンは泣いて父親と一緒にいこうとしてもがいたのです。保母のメアリーがどうか彼を宥めることができましたけれども、彼女が立ち去った後、再び彼は一人涙にむせぶのでありました。

3日目以降、ジョンの苦悩はますます激しくなってゆきます。ときどき部屋の隅で一人寂しく立っていることもありましたが、その他のときは悲しみにくれて泣きつづけていました。彼はなおも、一人か二人の保母と親密になろうとすることもあったのですが、たいていは隅で静かに遊んでいるか、テーブルの下にもぐりこんで一人で泣いているかのどちらかでした。5日目になると、保母たちへの接近はますます減り、誰かが彼を慰めようとしたときでさえ、無反応になりがちでした。その後、彼は大きなクマのぬいぐるみに心を向けるようになっております。そして、彼は殆ど遊ばずに泣いていることが多くなったのです。絶望にうちひしがれ、時には床に寝転がったり、悲痛のあまり両手を捻ったりしていました。ときどき特に誰に対するわけではなく怒鳴り散らし、ちょっとした接触のときに保母メアリーの顔を叩くこともありました。

6日目に父親が3日ぶりに訪ねてきたとき、ジョンは父親をつねったり、叩いたりしております。それから顔を輝かせて、戸外用の靴を取りに行き、嬉しそうに戸口のところへ向いました。けれども父親が彼を残して一人で去ったとき、絶望が彼をおそったのです。保母メアリーのところに行きながら、彼は怒りをこめて父親を見返しました。それから彼はメアリーからも離れ、虚ろな表情で一人毛布を抱きしめて座っておりました。

その後2日間、ジョンの様子は絶望そのものでした。彼は遊ぶことも食べることも、要求することもせず、また彼を元気づけようとして声をかけてくれる保母たちにまったく応じようともしません。ある子どもが、保母の膝の上にいる彼を押しやろうとしたとき、ジョンは怒りの声をあげました。けれど一日の大部分、彼はクマのぬいぐるみの上に頭をのせ、床の上に無感動なまま沈黙して寝転がっていたのです。

8日目のお茶の時間に父親が訪ねてきたとき、ジョンは痙攣を起こして泣き叫び、食べることも飲むことも受け付けません。父親が帰ったとき、彼は絶望にうちひしがれ、もはや誰も彼を慰めるなぞできない

いのでした。保母メアリーの膝から這いおると、彼は部屋の隅へのろのろと這っていき、大きなクマのぬいぐるみの側で泣きながら横たわりました。驚いた保母がいろいろと慰めてみたもののまったく応じません。いつも快活に振舞う若い保母たちは、子どもらの時々の泣き叫びには慣れっこになっていましたし、どの子にも担当の保母というのはいませんでしたから、ジョンの混乱状態はなかなか気づかれないうまま時間が過ぎてゆきました。そしてそれが気づかれた時ですら、子どものニーズが求めるところの代理のマザリングは、仕事のシステムの上、出来かねることだったのです。

最後の日の9日目も、ジョンの様子は変わりません。母親が迎えに来たときも、彼は一人の保母の膝の上で意気消沈して虚ろなまま座りつづけていました。母親を見ると、彼は身を投げ出して大声で泣き始めました。何度も母親の方を盗み見ながらも、‘大きな叫び声をあげて、狂ったようになり’顔をそむけ続けたのです。数分後、母親は彼を膝の上に乗せてみたものの、彼はもがいて叫び声をあげ、背中をそらし、泣きながら母親の手を逃れ、その場にいたジョイス・ロバートソン(傍らで観察していた)の膝に駆け込んだのです。ジョイスは彼を宥め、しばらくしてから母親の方へ彼を押しやったのです。やがて彼はじっと母親に抱かれたままでいましたが、彼女の顔を見ようとはしません。その後間もなく、父親が現れましたので、ジョンはまた母親から離れ、父親の腕に抱かれました。彼は泣き止み、それから母親の顔を睨みつけたのです。<彼はきびしい目つきでじっと私を見据えました。今まであんな目つきで私を見たことはありません>と、後に母親は語っております。ここに、ジョンの母親へ向けられた深い恨みと、そのようなことが再び起こるのではないかという強い疑心と不安とが明らかに認められます。

帰宅後の第1週目、ジョンはよく泣きました。彼は物事が少しでも遅れると、我慢ができなくなり、しばしばかんしゃくを起こしました。彼はすべてのことにおいて両親を拒否したのです。愛情も慰めも受け入れようとはしませんでしたし、彼らと一緒に遊ぶこともしません。彼は自分の部屋に閉じこもって彼らからなるべく離れるようにしておりました。

第2週目になると、彼はさらに無口になりましたが、第3週目には今までよりもいっそう苦悩している様子でした。再びかんしゃくを起こすようになり、食物を拒否し、体重も減少し、睡眠不足に陥ったのであります。しかし今度は、しがみつき行動がみられるようになりました。彼の両親は、このような息子の状態にショックを受けて、彼に最大限の関心を払い、彼に自信をとり戻させるためにできる限りのことをしました。彼らの努力はいくらか報われ、やがてジョンとの関係は非常に良好になってゆくのです。

しかしこの改善も不確かなものでありました。それはかつて乳幼児施設でジョンを観察していたジョイス・ロバートソンがジョンを2度訪ねたときに明らかになりました。ジョンの帰宅後4週間を経過してから彼女は初めて訪問したのですが、この後の数日間、彼は食事やら両親の注意をも拒否して、元の状態に戻ってしまっていることがわかったのです。この3週間後の2回目の訪問の後にも同じことが起こっております。その後5日間、ジョンは非常に動揺した様子が窺われ、母親に対して明白な敵意を初めて示したのであります。

・追跡調査

ジョンが4歳半になった3年後に訪問してみますと、彼は両親に喜ばれるような可愛い少年になっていました。しかし、彼らの報告によると、ジョンは尚も母親を見失うことを過度に心配し、予想される場所に母親がいなるときにはいつも腹を立てていたことが判明しました。また、外観上は憂うつではないとしても、母親に対して敵意を示したり、挑発的に振舞ったりすることも時折あるということでありました。

■編集あとがき

【タヴィストック】在籍中の1976年、私が Dr.ジョン・ポウルビィの講義を受講中に上映された「分離不安の子どもたち」のドキュメンタリー映画が現在 DVD 化され、購入可能と知った。驚きであり、かつ心躍った。そして、【ロバートソン・フィルムズ】は私にとって個人的には‘失われし時を求めて’の心の旅路ともなった。あの映画の子どもたちに再び会えたのだ。＜彼らが戻ってきてくれた！＞それが殊の外嬉しい。私にとって‘彼ら’とは‘私自身’でもあったのだから・・・そして、もしかして‘あなた’も‘彼ら’であるのかも知れない(?!)。心理臨床家として生きる限り、これから尚も彼らと手を携えて、共に歩んでゆかねばならない。ジョン・ポウルビィに倣って、私もまた巡礼者(ピリグリム)の一人として・・・

この記録映画を心理・教育・看護などの専門職として将来を担う若い方々にぜひお勧めしたい。貴重な‘教材’と考える。大学・大学院の教育の現場で、そして病院関係者の皆さま方にもぜひともご覧頂きたい。そこで、【Robertson Films】のWEB サイト(<http://www.robertsonfilms.info>)のたくさんの情報から幾らか抜粋して翻訳を試みた次第である。広く皆さま方に関心を抱いていただくためにも、特にそれぞれの子どもについて印象深い、より鮮やかな像をお伝えしたいと思い、この【ロバートソン・フィルムズ】のWEB サイトの他にも、下記の参考文献を活用したことをお断りしておく。子どもたちのイメージは、私の記憶の中ではまるでジグソーパズルのピースを撒き散らしたかのように散り散りばらばらでありましたが、たくさんの‘ピース’を頂戴したお蔭で、数多の繋がりの中で彼らは再びいのちを得、懐かしいものとして蘇ってくれたと申せましょう。ここに謝意を表したい。(2013/09/20 記)



《参考文献》

- ・ジョン・ポウルイ著 「母子関係の理論 I 愛着行動」
黒田実郎・大羽葵・岡田洋子訳 1976 岩崎学術出版社
- ・ジョン・ポウルイ著 「母子関係の理論 II 分離不安」
黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳 1977 岩崎学術出版社
- ・ジョン・ポウルイ著 「母子関係の理論 III 対象喪失」
黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳 1981 岩崎学術出版社
- ・モード・マノーニ著 「母と子の精神分析」
松本雅彦・山口俊郎・西田稔訳 1984 人文書院